社会福祉 社会保障 は、いま ㉕

新型コロナウイルスとの共生

新型コロナウイルス対応の緊急事態宣言が9月30日に解除されました。病床使用率など医療のひっぱくが改善され、1週間あたりの新規感染者数も大幅に減少しました。

「第5波」の流行規模は速く、大きく、大都市から中小都市・地方へ、若い世代から家族へ、さらには医療施設・高齢者施設へと一気に広がりました。医療機関や宿泊療養施設だけでは受け止めきれず、入院できないまま自宅療養中に亡くなるケースが相次ぎました。「自己責任」（自助）という言葉まで生まれ、新たな社会不安を作り出しました。

マスコミは連日、都道府県を越えた移動の自粛やテレワークの実施、不要不急の外出を控え、食料品などの買い物も回数を減らすようにと呼びかけました。多くのイベントや行事、例えば同窓会のような企画までが中止・延期となりました。人々の交流・つながりの機会が減少し、閉じこもりが社会的につくられるという結果になりました。

我々サンシャイン福祉振興会も、夏祭りなど行事の多くを中止し、施設の面会は、玄関においてガラス越しで行っていただくなど、入居者やご家族に不自由なお願いをせざるをえませんでした。食堂のテーブルは間隔をとり、アクリル板の衝立を設置しました。また、職員が施設内に新型コロナウイルスを持ち込むことのないよう、感染症対策の基本の徹底を図りました。

職員は日々、検温などの体調管理を行うとともに、家族に発熱者があった場合は自宅待機、利用者ごと・ケアごとの手指消毒、マスクの正しい着用、換気の徹底、休憩室や会議における「密」の回避、人ごみへのプライベート外出の自粛などを行ってきました。

コロナ禍は、この「第5波」で落ち着くのでしょうか。今回の収束の要因には、国民の行動の自粛とワクチン効果があったのではないかといわれています。専門家は「第6波」は必ずくるとみています。室内の換気が不十分になる冬場への対策が不可欠で、マスクの着用、イベントや飲食における一定の制限は引き続き必要となると考えています。

「新型コロナウイルスとの共生」はこれからのキーワードとして高齢者サービスの中核に据えていかなければなりません。職員の高い緊張感を前提とする日常の維持・継続はこれからも続くことになります。会議や連絡のオンライン化も新たな時代のツールとして発展するでしょう。

大友信勝
（社会福祉法人
サンシャイン福祉振興会理事長・
聖隷クリストファー大学
大学院教授）

文芸コーナー

短歌

・若き日の夫の写真は雄々しくも　軍刀下げて北支の丘に　美水庵瑞穂

・日に幾度同じ話を繰り返し　お互い様のデイの一日　服部秀子

・母生まれし信濃は遠しそばの花　今井康子

俳句

・涼しさが増してお腹が早くへる　修衛門

・不要不急ひ孫の顔も忘れ去り　冨貴江

・年重ね皺の数ほどひ孫増え　纐纈誠子

・秋を彩る紅葉の一葉　本にはさんでおく栞　柳子

漫俳

・秋近し山の宝がどこえやら　貫一

・今来たよ妻の顔にも笑顔来た　昭二

川柳

・秋雨かいやなウイルスいつ消える　はぎ江

・送迎車稲刈りながめ秋むかえ　睦美